（続紙　１）

京都大学	博士（　教育学　）	氏名	河井　亨
論文題目	授業／授業外にわたる大学生の学習ダイナミクスについての研究 ―ラーニング･ブリッジングの検討―		

（論文内容の要旨）

本論文は、大学生の授業での学習と授業外での学習とその間の関係を「学習ダイナミクス」と捉え、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）における教育実践、「大学生のキャリア意識調査2010」に基づく全国調査をフィールドやデータとしながら、学習ダイナミクスの実態と可能性を明らかにしようとした論文である。

論文は、まず問題部分の第1章において、大学教育改革の動向の概観、学生の学習に関する先行研究のレビュー、とくにコミュニティ、学習アプローチに関する研究についてのレビューをおこない、その上で、授業学習と授業外学習とその間の関係としての学習ダイナミクスの実態と可能性を明らかにすることを本論文の目的としている。

第2章では、WAVOC教育実践における3つの調査研究を通して、WAVOC教育実践とそこに参加する学生の学習ダイナミクスが検討された。調査①の結果からは、WAVOCのプロジェクト参加学生が非参加学生よりも、大学の教職員や大学外の社会人等と協働するといった「かかわり」の機会が多く、自主学習・読書に時間を多く費やしており、より積極的に授業外での学習に取り組んでいることが明らかになった。プロジェクト参加学生は、現場での活動を通じて興味関心や物事を知ることの責任感から授業外での学習に取り組んでいると考えられた。こうして、プロジェクト参加学生の授業外での活動と学習の間の結びつきが示唆された。

調査②の結果からは、現場での実践をリフレクションさせる機会が、学生の授業外での学習への興味関心や物事を知るという責任感を喚起していることが示された。調査③の結果からも、同様の関連が明らかにされた。以上の結果をふまえて著者は、WAVOCプロジェクト参加学生が、授業外でのプロジェクト活動と授業という異なる状況の間を移行・往還しながら、一方での知識・経験を他方での学習に結びつけて学習を統合するという学習ダイナミクスを展開していると考えるようになった。そして、そのような学生の授業／授業外にわたる学習ダイナミクスを「ラーニング・ブリッジング」と概念化した。

第3章では、ラーニング・ブリッジングという概念を、行動主義・認知科学・状況論といった学習論のなかで理論的に考察し、位置づけ、その上で実践コミュニティへの参加とラーニング・ブリッジングが学生の学習にどのような影響を及ぼすのか、WAVOCにおける教育実践調査と全国調査から実証的に検討をおこなった。その結果、第一に、ラーニング・ブリッジングをしている学生たちは、大学生活の中で学習に取り組まない学生たちと比べて自主学習・読書に多くの時間を割き、知識・技能の習得

を高く習得していること、さらに授業での学習と授業外での学習のどちらか一方に重きを置く学生たちと比べても、知識・技能を高く習得していることが明らかになった。第二に、全国調査の結果から学習に繋がる実践コミュニティの種類を検討した結果、学習に関するサークル活動や授業で知り合う友人同士でおこなわれる実践コミュニティが多く該当することがわかった。全体的には、アルバイトや小中高時代の地元の友人との集まりが多く挙げられたが、それらは授業外学習を行う実践コミュニティとはなっていなかった。

最後の第4章では、これまでの研究結果を踏まえて、授業での学習と授業外での学習とその間の関係として、授業外で実践コミュニティに参加してそこで学習に取り組み、その授業外での学習を授業での学習にラーニング・ブリッジングしていくという学習ダイナミクスが、学生の学びと成長にとって重要であることが総合的に考察された。実践的に見れば、ラーニング・ブリッジングは、学生が教育経験を自ら編集していく力と責任を全うしていくことにつながり、教育実践上の目標、カリキュラム上の目標、そして大学教育改革政策や制度全体の目標を貫く学生の応答の形の１つであると考えられ、本論文を締めくくっている。

（続紙　３　）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、大学生の授業での学習と授業外での学習とその間の関係を「学習ダイナミクス」、ひいては第2章末で「ラーニング・ブリッジング」と概念化し、早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター（WAVOC）における教育実践、「大学生のキャリア意識調査2010」に基づく全国調査をフィールドやデータとしながら、ラーニング・ブリッジングという学習ダイナミクスの実態と可能性を明らかにしようとした論文である。

本論文は、いくつかの点で高く評価される。第一に、本研究が大学生の学びを教室内にとどめず教室外への活動へと拡張したこと、しかしながら教室内での学びとの関係を切り離さずに、正統的な学習研究の一つとして本研究をおこなったことである。教室外の活動に学びを見出そうとする研究は、ボランティア活動やインターンシップ、サービスラーニングをはじめとする正課外活動の諸研究があるが、うがった見方をすれば、それらの研究は教室内での学びを無きがごとく扱っており、あるいは軽視する傾向がある。本論文は、両方の活動の価値を十分に認めながらブリッジさせており、従来の学習研究を新しい地平で切り開いていく独創性豊かな研究となっている。この点、高く評価されるものである。

第二に、本論文は大学生の学びと成長に関する国内外の文献を丁寧にレビューしており、過去に得られた知見を、新しいラーニング・ブリッジングの研究のなかでも同様に見出して、知見を更新していることである。たとえば、ラーニング・ブリッジングは、正課外の活動（WAVOC）が授業外学習へと導かれ、教室内の学習と絡んで学習がより豊かになっていくことを焦点化したものであるが、このようなラーニング・ブリッジングをおこなう学生は、そうでない学生に比べて、自主学習・読書に多くの時間を割き、知識・技能を高く習得しているという結果が得られている。これまでの研究でも、授業・授業外でバランス良く学ぶ学生は、同様の特徴を持つことが実証的に示唆されてきており、本研究では、その授業外学習の部分が単に授業外学習というのではなく、表だっては教室内の学習に関係する活動ではないにも関わらず、ある条件が整えば、正課外の活動が授業外学習を促す場合もあるということを示唆するものとして、新しい知見であり、高く評価されるものである。

第三に、研究の方法論である。第一に、WAVOCというボランティア活動のフィールドを参与観察し、そこでインタビューや調査を重ねながら、参加学生がいったいどのような学びをしているか、していないかを丁寧に解き明かし、その上で正課外の活動が教室内の学びにブリッジしていくというラーニング・ブリッジングの概念を仕上げていった点である。第二に、フィールドで得られた個別の事象を、2000人以上の全国調査によって一般化をはかった点である。第一のWAVOCのフィールド研究だけであれば、本論文のラーニング・ブリッジング概念の一般性が問題となったところであるが、全国調査をおこなったことでこの問題を回避している。そして、ラーニング・ブリッジングが一定程度一般的に認められることを示している。

丁寧にフィールドで起こっていることを明らかにしていく事例研究、大規模調査による一般化研究をうまく織り交ぜて本論文を仕上げた点も、高く評価される点である。

口頭試問では、本論文が正課外活動の教室内での学びに影響を及ぼしていることを明らかとしたものの、ラーニング・ブリッジングと呼ぶからには、教室内での学びから正課外活動あるいはその他への影響も見られなければならないのではないか、といった問題点が指摘された。また、実践コミュニティ論では、立場はいろいろありながらも、多くは実践活動それ自体が学習だと見なした上で議論がなされている。しかし、本論文では学習に直結しない実践コミュニティがあるという知見が提示されており、同じ実践コミュニティという用語を用いていても、本論文で扱われる実践コミュニティと先行研究のそれとは別物ではないのか、はたまたそこでの学習とは何なのか、といった用語の定義に関する問題点が指摘された。ほかにも、分析の仕方や本論文で扱うところの実践コミュニティの創出可能性など、種々問題点が指摘された。しかしながら、それらの問題点は著者の今後の課題を明らかにするものであって、本論文の価値をいささかも損なうものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成25年2月7日、論文内容とそれに関連した試問をおこなった結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日：　　年　　月　　日以降